

陶芸家 後藤 眞子 Masako Goto



たとえば自分の作品であっても、
同じものを二つと作りたくない。

今から40年ほど前に紙粘土土人形ブームがあった。人形を見たり、人形で遊んだりするだけでなく、紙粘土を使って人形づくりを楽しむものだ。陶芸家・後藤眞子の原点も、この紙粘土人形にある。多くの初心者と同様、彼女も人形づくりのための教室に通い始めた。しかし、すぐに一人の先生から教えられることだけでは満足できなくなり、何人かの師に学んだ。後藤の内側から溢れ出る獨創性が、同じような作品ばかり作ることを許さなかったからである。

何事も突き詰めて取り組む後藤は紙粘土で人形を作るだけでなく、人形に着せる服も実際の布地などを使い本物そっくりに仕上げた。ついには人形に嵌め込む目玉をガラスで作るほどだった。こうして人形づくりに没頭して10年ほどが経った頃、ある事件が起こる。亡くなった実父を弔おうと、棺に自作の人形を入れて茶毘に付したところ、意外なことに

紙粘土人形は焼けて灰にならず、まるで陶製の人形のような姿で現われたのだ。実は彼女が使っていた紙粘土は、天然石を砕いて粉にしたものが入った石塑粘土と呼ばれるもの。そのため、火葬の際に1000度ほどの高温で焼いても灰にならず、陶器のように焼き締められるのだ。この経験からやきものに興味を持った後藤は、人形づくりに区切りを付け、

陶芸の道へと進むことにした。最初の頃は茶碗を手掛け、次に花器を作った後藤だったが、やはり彼女は職人というより芸術家タイプである。「同じものを二つと作りたくない」という生来の考え方が頭をもたげ、人形をはじめとしたオブジェづくりへと方向転換した。「他人のやらないことができる」という思いが、後藤の原動力だった。



平成の恵比須さん
陶土
2014